



さかき傘
挿絵：天海雪乃

アダ
ム
8

変わる世界

田
心
春
期
な

試し読み版

あとみっく文庫



じゆうに
地遊尼エンジュ

睦月を護衛する天使少女。身の丈ほどもある大剣を操る。



ふじたむつき
藤田睦月

すべての女性を支配する“蛇眼”の力を秘めた少年。黒崎家に囚われた際、身体が女体化してしまう。



いべくさ
伊部草マキナ

秘密組織「FeTUS」の一員。同級生、睦月を監視するも彼へ惹かれていき…。



ミスA

『FeTUS』幹部の一人。中世以前から生きていたと思われる、年齢不詳の幼女。



白原恋 ラヴリエル・バラン

睦月が慕う先輩の少女。その正体は『FeTUS』の騎士、ミスBである。



勝江昴

睦月のクラスの担任教師だが、正体は『FeTUS』のエージェント・黒猫ことミスC。



地遊尼ミカ

睦月とエンジュ、二人の保護者となる大人っぽい美人の先輩天使。

黒崎慶吾

ミスAに造反し、独自に蛇眼を狙う黒崎家の当主。ミスCの創造主。

黒崎俊太郎

慶吾の一人息子。リゼルと炎呪を従えている肥満体の男。



里輪ルシア

蛇眼を狙う魔族の美少年。睦月に懐きすぎて、友人以上の関係に？

リゼル・バラン

英国の名門バラン家の次期当主候補。しかし『FeTUS』を裏切り、黒崎家の軍門に下る。



加賀利炎呪

黒崎家によって創りだされた、エンジュとそっくりのバイオロイド。

STORY

世界のあらゆる女性を発情させる力を「蛇眼」を右目に秘めた少年・睦月は、天使、魔族、そして人間側の秘密組織『FeTUS』に監視される生活を送っていた。普段は天使エンジュとミカに護衛される睦月。彼は魔族の美少年ルシアや、『FeTUS』の少女マキナとも心を通わせ、三勢力が争わずに済む方法を模索する…。——文化祭で活気づく学園に、蛇眼を手に入れるべ

く、黒崎家の尖兵、炎呪が襲来する。睦月を守るためにエンジュ、マキナ、ルシアと恋は応戦するも、慶吾に操られていたミスCにより、睦月は黒崎家へと拉致されてしまうのだった…。俊太郎やリゼルから肉体を弄ばれる睦月少年。しかし突如その性別が女に変わってしまい…？

これまでのあらすじ

「何を見てるんですか？」

「んー？ ちょっと船を買おうと思つて」

「見ているのは、個人所有のクルーザーのオークションのようだった。」

「一台数千万から数億。庶民の睦月にはクラクラする金額なのはともかく、一応まともなものだと分かりほつとする。」

「積載9tまで……7tくらいか。インゴットひとつにつき何キロだっけ」

「ぶつぶつ言いながら、何事か計算しているようだ。睦月が首をかしげていると。」

「くふつ、まあいいや後回しで。それより……うひひ睦月ちゃん、これ、なんだか分かるかい？」

「タブレットのページを切り替えた。」

「学校の健康診断で見た、血液検査の結果？ だろうか。馴染みのない項目が並び、そこに数字が並んでいる。」

「とりあえず分かったのは名前欄の『田藤^{たかむす}如月』という文字だけ。つまり睦月に関する調査のようだが……。」

「君の身体の簡易検査報告。女になったけど、とくにその形質には性別以外の変化なし」
「タブレットを投げ捨てる男。」

「ようやく君を抱けるってことさ。うひひひひ」

「やうっ、あ、やあ……っ」

鈍重そうな見た目のわりに、恐ろしく素早い手つきで抱きすくめられた。

ここに囚われて三日目。逆に心配なほど身の安全は保障されてきたが……。

この性欲の化身を前に、安全だと考えるのは気が早かった。肉体的に問題がないか調べられていたようだ。そして、

普通の女の子の身体。セックスができるという診断が、いま出てしまった。

☆

☆

「女体化ってのはさすがの僕も経験なくてさあ、ヒヒ、興味があるんだ」

脂肪だらけの男の腕力は、腕の太さに比例して強い。女性化したことで筋肉量が変わったかどうかは自覚できないが、どちらにしろ睦月では手も足もでなかった。

ベッドに転がされて、そのまま腰を持たれた。ちょうどでんぐり返しの途中で止められた形だ。

スカートの丈はもともと不自由なくらい短いので、めくれてもいないのにショーツが出

てしまふ。ちようど睦月の目の前で。

「うっひひ、ねえねえどう？　こういうのって自分のを見ても興奮するもの？」

「……よ、よく分からない、です」

興奮はともかく、あまりの気恥ずかしさにふいっとそっぽを向く睦月。

与えられたシヨーツはどんな素材なのか、質感はシルクなのに、肌にはりつくとかやけに透ける。格好のせいではつんばつんに引っ張られていると、お尻の切れ目がうっすら見えるくらいだった。

白いお尻の中央で、暗い線が通って、そこから連なる色の濃い部位には濡れたピンク色が広がっているのも。

女性の身体になって一番気になったのはもちろんここだ。ロシアのしたことなら身体に悪いことはないと信頼しているが、やはり『ない』というのは、単純に喪失感があつて落ち着かない。

そして同時に、なくなったことで『ある』ものには……。

——ふにゅん。

「ン……っふんっ」

「うひひ、やっぱり敏感だなあ、ねえ」

俊太郎の指が、遠慮なく透けた部分へ乗った。

それだけで自分が聞いても可愛い声が出てしまい、睦月は顔を真っ赤にする。

できたばかりのその部分は、慣れがないせいかな。もともと女の子はこれくらい感じやすいのか。ひどく敏感で、それでいていやらしかった。

浅い部分を撫でられているだけでジンジンと燃えるように熱くなって。熱くなるほど頭の中にトロトロした濃霧がかかる感じ。

もつと触って欲しいと思ってしまう。

「ねえ、ココ好き？ そんなに気持ちいい？」

「うっ、うっ」

気持ちいい。

素直にそう思うし、あちらも分かっているのだろう。と行って正直に言えるわけがなかった。

セックスにはもうずいぶんと慣れ、大胆さもある睦月だが、根っこは年頃の男の子なのである。女の子みたいなことをされて気持ちいい。なんて言えるわけがない。

「おっと、クリちゃん発見。びんびんに勃起してるねえ、男の身体だったころも可愛い顔して立派な勃ち方だったけど、こうなっても元気なもんだ」

「んくっ、う、そ、そこ、やめてください」

「ひひひ、クリちゃんってどんな感じ？ ペニスの名残だとは聞くけど、やっぱち〇こ触られるのと似てる？」

「んふっ、んん、……う、かも、です……ああっ」

ペニスの感覚はなんなくその付け根。尿口あたりが近い気がするが、ひっそり残る小粒には亀頭を張ったときの感度が残っている。

揉み潰されていると、とくに尿道、お腹の中がおしっこでも我慢してるみたいにむずむずする。

「も、もう、ああ……恥ずかしいです」

無性に情けなくなつて、泣いてしまいそうな顔でふるふると首を横に振る睦月。

もともと中性的な少年の顔は、女性化したことでほんのり甘い丸みを帯びて、幼さが強調される。そんな顔つきで赤くなつて懇願するのは、男の生理を刺激するばかりだった。俊太郎は大喜びでショーツに手をかける。

くるくると引き下ろされていく……。まだできたばかりだからか、睦月が性別を違えればもともとこうだったのか。赤ん坊のように幼く閉じたスリットがあらわになった。

普通に立てば外陰部が過剰なくらいぶつかるほどの土手高なのが、いまは両足を大きく

開いているせいかぱっくり割れて中の淡紅色を見せている。言われた通りクリトリスだけがピンと妙に発達して大きく膨らんでいた。

股間に風があたる感覚は、男も女も一緒のはずなのに。男のとき感じた解放感は薄かった。股間に、自分の中をせき止めている、蓋のようなものがなくなった、ひどく頼りない気分。

「そんな顔しないの。クク、穴をイジられるヨさはもう知ってるんだらう？」

「え……あつ！」

男は躊躇なく、まずそんな睦月のお尻の谷間に顔を埋めた。

分厚い舌が深い部分を撫でる。ゾワゾワツツと鳥肌が立つのを感じ慌てる睦月。今日最後に排泄したのはいつだったか。そのときはちゃんと拭いたはずだけど、そのあと汗など溜まっていないか。色々考えて……。

「ほらほら、ここは最初っからこんなに敏感だ」

「あつ、あつ、あああ………あつ」

すぐに何も考えられなくされた。

硬く尖らせた舌先は、羞恥に閉じた括約筋を乗り越えたかと思うとゼリーのようになり、内側からぬめぬめ直腸を舐り回してくる。

男の身体でも、ミカやルシアに何度かイタズラされている睦月のそこは、かなりの性感帯に仕上げられていた。

そしてこの俊太郎という男、テクニックという意味ではミカたちのやり口が子供だましに思えるほど練達したものがあつた。

内部からぐりぐり抉られる括約筋は、あつという間にほぐれていった。

「んあ、あああ、あつ、ああああ」

筋肉の輪が広がっていくのに合わせて、自分の身体が変わっていくのがはっきり分かる。

「お尻の感じはどう？ 男のころとちがう？」

「くっつ、わ、分かりません」

嘘だ。ちがいても、変わらないところもはっきり分かる。

男のころはお尻をいじられるとペニスの根元が燃えるようになるが、女性の身体だと、同じ熱さでも燃えている部分が変わりにくい。しいて言えば尿道にちりちり淡い電気を流されている感じ。それが下腹部全体をねっとり温める。

その点では男と女ははっきりちがった。ただ、

「あ、あ……しゅ、俊太郎さん……やめて。それ僕、僕っ」

「フッフ、火が付いてきたかな」



熱くなった部分を通る血液が、マグマのように熱くなって、全身にねばつく微熱を振りまくのは同じ。

うっとりしてしまいうくらいの喜悦は同じだった。

「あああ、ああん、だめ、だめえ、お尻変になるうう」

行き場のなかった両手で、胸元のエプロンをぎゅつと掴んで恥じらう睦月。

その表情と、なにより目の前に置いた、刺激をやめたのにふわりと花開いていくヴァギナの様子が、俊太郎にも変化を知らせていた。

土手高気味なので、潰れあつた肉のぶつかりが、内部の充血した粘膜に広げられていく様がよく見える。

「うひひ、変になるのはお尻だけじゃないさ」

男の手が見せつけるように少年の目の前をひらひらした。

自然と目をやれば、指はそのまま口を開けたラビアにあてがわれる。

「う……う」

「イジって欲しい？」

「っ、そ、そんなこと」

あえて女性器に、本来ないはずの。自分ではない部分に意識を向けさせてくる男の陰湿

さに、睦月は真っ赤になりながら眉根をひそめた。

欲しい。なんて言えるわけがない。身体はこんなでも心は男なのだ。最悪女性や、ルシア相手にならおねだりもできたろうが、全身からオスの性欲がにじみ出るような男相手に、まして自分を誘拐した人間にそんなこと……。

——にぶ。

「つくうんっ」

だが心では100%拒むと決めていても、身体のほうはどんどん変わっていた。

入口をネチネチかき混ぜる指先に、秘苑がざわざわと蠢いて自分から吸いつきに行ってしまう。男として女性器の持つ構造の妖しさにゾクゾクすると同時に、その動きが自分の思いを代弁していると分かった。いま自分は何をされたいのかを。

「イジってほしいんだろ？」

「……………」

クリトリスにも穴の入口にも触れず、はみ出した陰肉だけを優しく撫でる。それ以上の刺激は決して与えようとせずに聞いてくる。

女がこういうとき何と言うのか、当然のように把握しているのだ。

女にされた睦月がおずおずと首を縦に振るのも、当然とばかり薄ら笑いで見ていた。

☆

☆

ベッドにあぐらをかく男に抱きすくめられると、そのぶくぶくの脂肪がクッションになる。ちょうど柔らかいソファに座らされたような格好にされた。

ソファのように座る権利は睦月にある。

だからその足が、大きくMの字に広げられているのは、本人の意志だった。

「ほら、ほら、うひひ、分かるかい。君のおま○こはこんなにいやらしい形してる」

「あ、う、わ、分かる……う」

時間をかけてトロカされたヴァギナには、いま男の指が二本入っている。

それだけでもギチギチに近いくらい狭い穴だが、指が折れ曲がったり、ピースサインするのには驚くほど柔軟だった。ヒダのリングが無数に連なっているような感じで、そのヒダ一枚一枚は分厚く張っているのだが、隙間の部分が柔らかいようだ。

(お、お腹の中に……ある。変な感じ)

女になって数日。当然ながら単純な好奇心で、男の身体との変化は確認している。少し膨らんだ胸の柔らかさを確かめたり。おしっこがどう出るのか眺めたり。

ただ一番の変化である性器も何度か確認したが……なんとなく怖くて、穴に何か入れようとは思わなかった。指で浅い部分を確認する程度で、

——にゆるう。

「くうう……んっ！」

こんなにもずっぽり深くまで埋められたのは初めて。

分厚い部分と、落ち込んだ隙間部分。微妙に性感の度合いがちがっていて、指のヒネリ一回ごとに新鮮で、慣れない衝撃が下腹部全体を襲った。

(僕……ダメ。もつと動いてほしい……なんて)

頭では拒絶したいのに、無意識に自分から脚を開いて、指を迎え入れてしまう。

「可愛いなあ睦月ちゃんは。クク、このまま本気で飼いたくなるよ」

それほど感じやすい睦月では、これまで何人の女を泣かせたのか。俊太郎の手指には格好の的だった。

急所を指二本で捉えておいて、親指では器用にクリトリスをくすぐりながら、もう片方の手は絶えず全身を撫でまわしている。

「乳首がぴんこ立ちしてるねえ。これ、男のころから立ちやすかったの？」

「んあっ、知らな……い、あんっ」

服の中でごそごそと薄い胸乳をさすり、そこからお腹へ。背中へ。時々感じやすいお尻の穴を撫でられると、男のひざの上から飛び上がりそうに総身が跳ねた。

男として勉強になるくらい巧みな指使い。体中から湧く淫らな虫が、じわじわと脳を浸食して、何か考えるのが億劫になってくる。

理性を取り戻せたのは、ニヤつく男の顔が正面に寄ってきたときだった。

(や……き、キスされるっ)

察して慌ててそっぽを向いた。

向こうからすれば愛撫の一環にすぎないのだろうが、幼い睦月は『セックス』と『キス』は別物と思っている。男のキスを受け入れるというのは、身体だけでなく心まで捧げてしまふように怖かった。

だがこの状況では、嫌がるほうが相手を焚きつけるようなものだ。

「フヒヒ、そうかいやかあ。まあ無理にとは言わないけどね」

むしろこのほうが楽しいとばかり男は、すぐに顔を引いた。

顔を、そして指を。

(あ……っ、ぬ、抜けちゃう)

イジくり回された膣内から指がぬるりと落ちていく。

睦月は慌てた。とつさに芽生えた抜いてほしくないという気持ちと、それを言えないプライドとで言葉がでない。

だが幸か不幸か、指は最後まで抜けきることはなく。入口付近にとどまった。

「いま焦った？ 抜いちやうと思つて焦つたでしょ」

「そ、そんな……あんっ」

「ヒヒヒ、そんな意地悪しないよお。僕は優しいからね」

キスもしつこくは迫らず、口の位置は耳につけてきた。

（んああ……いじわるしない、なんて……うそおつ）

あくまで『愛撫』だった男の態度が代わる。

言うことを聞かせるための、調教になってくる。

ゆるりゆるり浅瀬をくすぐりながら、敏感なクリトリスを押しつぶされた。その指使いに合わせて、耳の穴に舌を入れられると、それだけで感じてしまいそうになる。

そうして性感をさらに煽りながら、

「でも代わりは欲しいかなあ。そうだ、ちょっとこいつをあやしてくれよ」

「え……ひゃあっ」

睦月をひぎに乗せたまま、ズボンを脱いだ。

ただ今、ざあざあとシャワーで身体を流す小石の表情は、暗い。

大倉という男、あつという間に射精したあとも二時間のうちに何度か勃起し直しては、少女の白い柔肌に擦りつけるだけで射精していたが。そうして全身に唾液と精液をなすりつけられた汚辱感、充分に心に傷をつけたようだ。

(搦め手なぐりてに変えるか)

十年間、業界の先頭に立つ芝木は、直感でこの少女にはどんな方法が効果的かを推し量ることができる。

「入るぞ」

「っ」

返事を待たずにシャワールームへ乗り込んだ。

タオル一枚の男が入ってきて、小石は一瞬ビクッと肩を震わせたものの、そっぽを向いて反応は見せない。

無視。がいまできる精一杯のようだ。

むしろどのソープの香りが立ちこめる室内に、香水を帯びた男のニオイが混ざっても、出ていこうとか、泣き出したりはしない。

手ひどい処女喪失にも心が折れてはいないようだ。芝木は胸を撫で下ろしつつ、

「大倉先生が褒めていたぞ。今日はよくやった」

端にかけてあるタオルをとり、もう底をつきそうなボディソープをすくった。

「お前はいい商品になる。俺が保証する」

「あ……っ」

たっぷり泡を作って、白い肌に擦りつけだす。

一瞬ビクついた小石だが、タオルを介して、ソープを使う。清潔な行為ではあるため、汚辱感を感じないようだった。結果として男の手が自身の肢体を這い回っていても、抵抗せず受け入れる。

もちろん芝木に、綺麗にしてやろうなどという親切心はない。

ゆるゆると肉付きの薄い四肢を撫で回した。華奢な鎖骨から薄い胸乳、横腹からおへそ
のくびれ。太もも……。

「っ、う、……うっ」

大倉が派手に遊び回った部分は、とくに。

「ふ……、ふ……。っ、……く」

今日だけで何度目になるか。他人の指でラビアをかき混ぜられ、小石の表情には緊張と嫌悪の色が隠せない。

その表情の変化こそ調教師である芝木の望むところだった。

股下だけに限定はしない。全身をゆったり愛撫していき、時折股間に戻る。

少女は最初、されるがままだったが、次第に眉根をゆがめて、長い足をぎゅっと閉じるような仕草を見せるようになった。

嫌がっている。

会ったときからどんな恥辱も人形のように受け入れていた小石が、嫌がる。これ以上さ
れたくないという感情を見せる。

それがどういう意味か、分からない芝木ではない。

「痛みはなかったろう。特性のクリームをたんまり塗ったからな」

「え……？」

その心の間隙を縫うようにして告げた。

「部屋に行く前に塗ってやっただろう。どんな子供も娼婦に変えるクスリだ」

ぼとり、とタオルを落として、

「まあ個人差があるから、遅い者だと客としている最中は効かなかったやもしれんが」
オブラートなしの、れっきとした指でヴァギナを暴く。

「あつ、ああつ」

たつぷりほぐれた少女の女芯は、大倉のものを迎えたときより数倍柔らかくほぐれており、無骨な指を容易く飲み込む。

そして飲み込んだ分、少女の口から溢れた吐息は、甘く鼻にかかったものだった。

「ん？ まだクスリが効いているのか」

白々しく言いながら、改めてクリトリスから尿口へかけて。その底部へかけてをなぞり、にちやにちやとかき回す。

あのクリームはただの潤滑剤である。おかしな効果はない。客である大倉がクスリなどやっていない生娘を求めていたのだから当たり前だ。

だが一流調教師である芝木の指技にかかれば、偽薬効果でも少女を追い詰めるには充分だった。

小石は声をこらえようと下唇を噛んで、ピンピンと白い肩を震わせる。

自分がいま覚えている感情に、逃げ場が出来てしまった。快感を感じていい。その言い訳が出来てしまった。

プライドや矜持の壁が揺らぎ、官能が倍增したのが見た目にも分かった。最初人形のようにだった少女は、いまでは顔を真っ赤にして声をこらえている。なぞり撫でる男の手から逃げたがるようヒップをクネつかせた。

この逃げ道を、自分の望むほうへ作るのが調教師の仕事である。

「俺も流すでしょう。洗ってくれ」

少女の前に回りつつ、床に落としたタオルを拾って、ソープを足して渡した。

年のわりに筋肉の色濃い、男臭い肢体。少女は苦手そうに目を背けながらも、大人しく従いタオルを手にとる。

『感じてしまっている』という負い目がある以上、自分が触られるより、相手を触るほうがいい。という逃げ道があった。

ぺた、ぺた。洗うというより触れるに近いぎこちなさで、男の肌を掃いていく少女。

「そんなんじやダメだ。ほら、もつと体中を使って洗え」

「きや……っ」

その手が背中へきたタイミングを狙って、男は少女を抱き寄せる。

肉付きの薄いバストを、男の割れた腹筋が押しつぶすくらい強く抱擁した。小石は戸惑い、わなわなと肩を揺らしながら……。

「ひ」

まず逃がしたのは、胸よりもまず腹部だった。

柔らかくくびれたウエストには、男の前面にある強ばりが押しつけられる。その熱さ、

硬さ、巨大さに、下半身だけでもと引いて距離をとろうとする。

芝木は腰に巻いたタオルを落として、すでに雄々しく隆起したものを少女に見せつけた。先ほど見た大倉のものは決して小さいわけではなかったのだが、千以上の女の淫水に浸かった一流調教師のそれは、大きさも迫力も段違いで、威圧感に溢れている。

「そら、ちゃんと洗え」

腹部を引いて接触を避ける、少女の逃げ道はあえてそのままに、男は背中に回した手を動かすよう指図する。

「は、はい」

ペニスに意識の行っている小石は、その相手をしなくて済むならと、言われた通り男の首や背中にわしわしとタオルを撫でつける。

そして同時に、腹部を逃がすということは、必然、お尻を後ろに突き出さなければならず、

——むに。

「あ……っはんっ！」

芝木が腕を伸ばせば、ハート型の真っ白なヒップは前にも後ろにも下がれない。

男の指はつると谷間に潜り、可愛らしい肛門を撫でつつ、再度少女の牝地を捉えた。

すでに火のついていたそこは容易く男の指にくつろげられてしまう。

「あつ、ああ……つ、あの、さ、触らないで……」

とうとう少女の口から拒否が。弱音がこぼれた。

プライドが崩れた。確信した調教師は、周囲でなく粘膜がるつぽを刻む、穴の内部まで指を差し込む。

「やつ、あんつ、やめ……て。ああつ」

ぼとりと二度目、今度は少女の手からタオルが落ちる。

助けを求めるように、細く伸びた両手は男の首にしがみついたままだった。怯えているのがよく分かる反応だ。

無感情を努めてきた小石だが、膣からこみ上げる快感を転機にほじくり出された感情は、もう留めることもできなくなっていた。恐れや戸惑いがない交ぜになって、子供のように男にすがってしまう。

「クク、そう怖がるな。そろそろ気持ちいいだろう」

調教師の仕事は、究極的に言ってその、『すぎる』という感情を育てることである。上手く練れた手応えにニヤつきながら、芝木は空いているほうの手で少女を抱き寄せた。

「あ……ふ……」



恐れ強ばる少女の筋肉が、すぎる相手を見つけたことでわずかに和らいだのが感じられる。

もう片方の膣道を扶る指ではさらに強い手応えを感じていた。内部は本当に薬でも盛りれたように熱くヌメリ、指にギュウギュウと媚びるような食いつきを見せている。ぐつと押し込めば、粘膜が痛いくらいに輪のような形状で盛り上がり指を締める。

男を迎える準備ができている。性器になっている。

だからこそ少女はもう人形でいられず、「やめて」「離れて」と拒絶の言葉に逃げ込まざるを得ない。

同時に、新しく逃げ場を求めて、後ろへ逃げていたお尻を前へ前へ。

「あ……っ」

すると今度は、巨大な圧迫が腹部に戻る。

前へも後ろへも行けず硬直する少女に、芝木は今度こそ逃げ道を与えなかった。ぐいつと腰を押しつつ、蜜路へ指を含めたままの手でお尻を引き寄せる。

「は……はあ、ああ」

快感と同時に恐ろしい熱源を下腹部にあてられ、少女はついに、泣いてしまいそうな顔で男を仰ぎ見た。

泣いてしまいそうで、けれど薄ピンクに火照らせた頬に、どこか男に媚びるようなマゾヒズムを感じさせる表情。

「ククク、何度も言うがお前はいい商品になる。俺がしてやる」
男がそのあごをすくいとっても、懸念まじりに目を閉じるだけ。

「お前は俺のものだ」

「ン……」

唇を奪われれば、どこか安堵に近い鼻息がこぼれた。

この状況に、この男に。

調教師に自身を預けることに、同意したように。

「尻を突き出せ。そうだ。自分で広げてみせろ」

「は、はい」

シャワー室のタイルに手をつき、小石は言われるまま、そのしなやかな肢体を前へ折り曲げてみせた。

真っ白な背筋をS字にそらして、後ろに立つ男のほうへ腰を差し出す。言われれば手のひらをヒップの丸みにおいて、片側へ引っ張ってみせた。甘く色づくアヌスから、もうと

ろとろにふやけた臆果までをあらわにする。

ファンツァーリホテルのショーから五時間。持ち前の瑞々しきで、ビニールテープのあとがすっかり消えた肢体は、

もうあのときとは別人のようだった。

シャワーだけでは説明のつかない、ねっとりしたピンク色の火照り。わずかに匂う汗の香り。そしてなにより、男の視線を意識して恥ずかしそうに震える様子が。

(五時間で奴隷堕ち。早かったな、やはり相当なマゾだ)

調教師として計算に頭を働かせつつも、単純な満足感にほくそ笑む芝木。

いまは混乱や恐怖心が手伝つてのものだろう。だがこの状態を一度味わってしまったら、次からますますにこうして牝奴の顔をするようになる。人間は一度見つけた逃げ道には弱い生き物だ。

それが常態化してしまえば、もうれっきとした牝奴隷。百戦錬磨の芝木にはそれが重々分かっていた。

人間は墮落しやすい生き物なのだ。

「そら、入れてやるぞ。礼を言え、お前の穴を使ってやるんだから」
「っ、そんな……」

高圧的な言葉責めには反発の色が走ることもあるが、

——ぐっ。

「んっ……っ」

巨大な亀頭を、すでに指だけで柔らかく広げられたヴァギナへあてがう。

そのままぐいぐいと力をかけて、挿入を始めれば、

「礼を言え。わたしの穴を使っていたいてありがとうございます、だ」

「……っ」

「言え」

「あ、ありがとうございます……ごさいます」

——ぬふるっ！

男の物理的な熱を伴う威圧感に、根負けして奴隷の言葉を吐いた。

その瞬間を狙って亀頭が滑り込む。人生で二度目の挿入に、少女が目を丸くする。

「っぎ……っ、いっ、ぎうっ」

一度目はただの『痛苦』だった。注射に耐える小学生のように、奥歯を噛んで大人しくしていれば終わった。

だが二度目のこれは、意味合いも、そして感じるものもまるでちがう。

身体の底部が丸く広がっていく痛みと、違和感に、小石の喉からはこらえきれない鳴咽が溢れた。

「ほう、いい壺具合じゃないか。大倉先生も喜んだんじゃないか？」

「っ」

だからこそ調教師は、あえてその一度目を思い出させる。

痛苦と嫌悪を思い出させて、

「それに感じやすい」

ぴしゃりとお尻を叩きながら、くい、くい、穂先を縦に振るう。

「あっ、ん……っ」

百戦錬磨の芝木には、女体というものがどれくらいほぐれば、自分の巨根を迎えても感じだすかは経験で分かっているし。小石の身体がすでに十分に花開いていることも分かっている。

そしてこうしてゆるゆると入口からほぐしていけば、小さな穴は決して痛みは生じさせないことも。

その官能を後押しするのが大倉の存在だ。小さな快感が、あの『痛苦』よりはマシという逃げ場に代わり。あれよりマシ。という感情はまたこの、昨日まで見も知らなかった男

に犯されているという状況を好意的に捉える手伝いとなる。

「あふ……んっ、んん……ふあ」

「さっそく感じてるのか。うん？」

「そ、そんな……こと……あつ」

ずるりと肉矛が半分も入るころには、収縮する膣が畝を作って、ペニスに食いつくほどだった。これなら遠慮はいらない。調教師は、自分の経験上でもかなり早い女体の慣れ方にほくそ笑む。

類いまれなマゾヒズムを示す肢体へと、腰を送り込んだ。

「う……っ、うううっ、うううーっ！」

巨大な棒身が最初からなかつたように入り込み、ハート型のヒップの谷間と、毛深い男の腰とがぶつかりあつた。

「はっ、はあ……っ。はい、……つた？ 入っちゃ……つたあ」

強烈な圧迫感に、丸く見開いた目に涙を浮かべながら。少女は自分の身体のどこにこんな深い穴が空いていたのかと驚いている。

腹の内部が広がる異物感には、ハア、ハア、呼吸すら危ういが、痛みを訴える様子はない。男はさっそくゆるゆると腰を揺らしだした。抜き差しというわけではなく、ぴったり

小尻に腰をあてたまま、チークダンスでもするように全身を揺らす。

「いま入っているものに意識を集中しろ。今日からお前は、こいつに尽くし奉仕するだけの穴人形になるんだからな」

「あ……っ、あんっ、は……は、うう」

「なに、ギブアンドテイクさ。こいつに忠誠を誓った分、お前は幸せになれる。そらそら、もう気持ちよくなってきたるんじゃないか？」

「あ……あ……っ」

挿入が済んだ時点でこの動きを痛がる者はまずいない。だが『動かれる』という事実が恐怖ではあり、少女は自然と男の動きには従順に、ダンスに付き合う。男が動くのに合わせてお尻を揺らすようになる。

この状態で。自分の意思で男に合わせている状態で囁いた言葉は、催眠術のように女の意識化にすり込まれることを調教師は知っている。

「どうだ俺のち○ぼは。悪くないだろう。気持ちいいんだろう」

少女の背中に身体をくっつけ、耳元で囁いた。

まだ少女の中では痛みと異物感が強いはず。だが練れたヴァギナは、その端々に確実に快感を孕んでいる。

ならば彼女自身にそれを見つけるよう促せばいい。

「お前の身体は気持ちいい気持ちいいって言ってるぞ。俺に犯されて幸せだと思ひ出してらんじゃないか？　ぐっさり刺されて嬉しくなってきただろう」

するすると横腹やわきの下。つんと充血した乳首を押しコネながら言う。

とくにクリトリスが弱点で、巨大すぎる内容物のせいでパンパンに張った膣粘膜のところが突いてやると、

「あああつ、そ、そこは……あつ」

「気持ちいいんだろう？　クク、礼を言ったらどうだ。犯していただいてありがとうございます。ち○ぽ入れていただいで幸せですと」

「うう……ンンン、わ、分からない」

まだプライドは捨てきれないが、その肉の変化は、最も分かりやすい反応を示す箇所にくちをねじ込んでいる男にはまさに一目瞭然である。

異物に戸惑う膣道が、先ほど指にそうしたように、ぎゅうくとキツい収縮を見せる。

——ぬるっ。

「っうあああんっ」

合わせていたヒップから腰を遠ざけた。

ぬるぬるつとペニスが半ばまで抜ける。薄ピンクの膣畝が何枚か付いてきて、ハート型のヒップの谷間にわずかに見えた。それが収縮に従って中へ戻ろうとするところで、一転、再度ペニスを根元まで埋め込む。

「はあっ、あああああっ、すご、すご……いつ」

その動作を二度、三度。

ピストンが開始されても、少女の声音に痛がる色はなかった。

先ほどの簡易な催眠術で、本人が痛みより快感を探すよう本能付いてしまっている。一度こうなってしまうえば、もうペニスの繰り手にはどうあつても逆らえない。快感と痛みを天秤にかければ、人間は必ず前者を選んでしまうものだ。

「あっ、あん。やめて、ああ、もう、や……だめえ何これえ」

底なしの快楽に堕ち行く自分が分かるのだろう。もうよがりの混じった泣き言を隠すこともできない小石。

痛みや恥辱なら我慢すればいい。だがセックスの喜びに、我慢という防波堤は存在しない。これまで何人も墮としてきた女たちと同じ末路を迎えつつある少女に、調教師は満足げだった。

「心配することはない。そら、気をやってみろ。このち○ぽがお前を世界のなにより幸せ

にしてやると、身体で覚えるんだ」

「いやん、やめて、あんっ、やめてええ」

ずぶり、ずぶり、未熟な内道を痛がらせないギリギリの力で、下半身をたたき付ける。

すでに二人の身体は溶け合ったように官能を共にしていた。長大なペニスが行って戻つてを繰り返すと、少女の細い肢体は右へ左へうねり舞う。直線的なオスの動きに、包み込むようなメスの動きを返している。

「もう……あつ、もうだめ……えっ」

「言え。気持ちいいと。犯していただいてありがとうございますと」

「あつ、あつ」

無感情から弱音を絞り出したとき同様、勝ち誇った様子で急かす男。

感情を掘り起こされ、弱音を言わされた少女は、とうとうその行き着く先。観念したように両目を閉じて。

「いいんだろう。そら、どうだ」

「は、はい……ああん、気持ちいいです」

ぐいぐい責めくるオス肉を、トロけきつた膣肉で締め付けながら答えた。

「礼を言え。俺に、犯されてどう思っている」

突っ込んでくる六人を、ヘリの上からマキナは平然と見守る。

「作戦開始、殲滅戦オールドストロイ・・・Positive」

六人がヘリに狙いを定め、集まってきた瞬間、端を蹴って中空に身を投げ出した。

地上百メートル。まったく余裕のない高さから、スカイダイビングでもするよう降下し、
——ギョーン！

六人の真ん中を突きつけた。

「く……ッ！」

迎撃がくると思っていたのだろう。真っ直ぐ切り抜けられるとは思わず、六人とも中空で身体を平らにして空気抵抗で上昇を止めた。上昇エネルギーはあつという間に重力に負け、六人もまた彼女を追って下降する。

「作戦完了」

いち早く地面に降り立ったマキナは、改めてそんな六人を見上げた。

黒崎家に抗争を仕掛けるにあたり、問題は位置が掴めないことと、そしてこの魔嬢人形バイオロイドだった。最強の天使である地遊尼じゆうにエンジュの肉体を組成とした魔族の身体と、黒崎による人工改造。天使の炎を無効化し、FeTUSの技術を扱う魔族。一体でもその戦闘能力は計り知れないうえ、最低でも十二体に増産されている。

だが弱点も思った通り。六人だろうが十二人だろうが、その思考の根底は『加賀利炎呪』という一人の少女であること。つまり。

行動パターンがほぼ同期する。

「次元相転移」
ディメンジョントランス

追いくる六人へ向け、上空へと金色の魔方陣を展開した。

ぎよつとなる六人。だがもう遅い。六人とも着地体勢をとっており、ここから体勢を変えられない。

——ボボボボボッ！

六人とも魔方陣に直撃した。

弾かれた六体は、大理石の彫像のように真っ白になっている。

絶対零度以下まで体温を奪われれば、いかな黒崎の最終兵器といえど生命活動を失うことは前回証明済みだ。六体はそのまま地面に激突。

ガラスのように脆く割れ、ガラスどころか、粉のように舞い散った。

「ふう……」

改めて、周辺を確認するマキナ。

ここは……ゴルフ場のようだ。ホールまで二十メートルほど。ホールの中には無数の体

温反応があり、人間がひしめいているのが分かる。

だが幸いゴルフ場の中には人影はなく、

——どさつ！ ザッ！ ドスッ！

マキナを取り囲むよう降り立った、十八人は、バイオロイド炎呪だけ。

「計二十四体……予想より多い」

以前見た十二人よりは多いと予想していたが、想定したより増産のペースが速かったよ
うだ。

「アハハハハハハハ！」

十八人が一斉に笑いながら、巨大な剣を構えて突っ込んできた。

「次元転換ツール解凍。位相変数域、14の7乗まで広げ、ユークリッド空間内に随時展開。

交戦範囲、中心円半径10メートル」

整った芝生が連なる地面へ、黄金の方円を描いていくマキナ。

十八人は気にせずその中心へ突っ込み——。

「ッスラアアッ！」

——ガアンッ！

最初についた炎呪が斬りかかった。

黄金の糸で受けとめるマキナ。だが突っ立っていた彼女では、助走をつけた一撃には勝てない。弾き飛ばされた。

それは想定済みだ。上手く空中で反転し、地面に着地し直す。瞬間。

「アニヒレーション
対消滅」

——
ツツツ!!

ついさつき彼女の立っていた、つまり殴り飛ばした炎呪の立っている箇所。地面の芝生が足の裏の形に凄まじい光を放った。

熱の柱が発生し、炎呪を飲み込む。両足を吹き飛ばされた赤毛の肢体が上空数十メートルまではね飛ばされた。

衝突では負けたマキナだが、黄金の糸は数本がはち切れただけでまだ十分な強度を残している。『こよりにした糸』は構造上、斬撃、つまり切断に対し非常に強い。

「ツちいいいいっつ！」

一番近くにきた別の炎呪が改めて斬りかかってくる。

これも糸で受けとめ、そのまま斬撃の威力には逆らわず吹っ飛ばされた。直後、足下が

火を噴く。

「ぐ……ぎ……つまらないマネを」

最初に地雷を踏み、両足を吹っ飛ばされた者が起き上がった。両足はじゅーじゅー煙をあげているが、すぐに蘇生していく。

十八対一の数の差はあっても、炎呪に慢心はなかった。すぐにマキナの手の内を讀んで一度足を止める。

常に動き回って、十八人相手でも一対一だけに持ち込む。白兵戦では一対一でも分が悪いが、地面についた機雷のせいで炎呪側は一箇所にも長くいられないため攻め手は散発になる。細々とした一対一なら、マキナがとどめを刺されることはない。

とはいえジリ貧ではあるが――。

「目的は時間稼ぎ、かしら？」

クスリと笑う十八人。

FETUSの魔女は最大五人からなり、各々がチームワークも發揮できる。今日の目的が藤田睦月の救出と考えれば、マキナの存在は時間稼ぎと考えるのが妥当だ。

「残念ね」

――ズシャッ！

「クスクスクス」

「ウフフフフ」

炎呪たちのクスクス笑いが、ゴルフ場を不気味に反響した。

広大なゴルフ場全体にこだまする。

十八人どころではない。ざっと見て百を超える数がマキナを取り囲む。

「稼がせないわよ！ 死になさい！」

その数が一斉に飛びかかってきた。

いかに大量の機雷を用意していても、マキナ自身に危害がくる範囲での起爆はできない。数の力で起爆できる面積を潰したのだ。

人数に任せたごり押しは、ある意味で最強の戦術である。マキナに逃げ場はない――。

「Negative」

もつとも彼女に、逃げるつもりはなかったが。

「これは時間稼ぎではない」

ザアツと足下の芝生が舞い上がって彼女を包んだ。その一枚一枚が急速に白く、凍っていくの見える。

「あなたたちを全滅させるつもり」

「ハン！ 面白いわね！」

構わず突つ込む百人の炎呪。

凍った芝生——あれひとつひとつが次元相転移ディメンジョントランスにより温度を消失させる性質を負荷されているのは見て分かる。触れれば凍らされることも。

だが所詮質量は芝生の葉である。触れば凍るが、凍った肉体が押しつぶしてしまえば、最初の五、六人が凍ったところで彼女を守る盾はなくなる。この人数のぎり押しを防ぐ手はない——。

「その状態でどう全滅させるって!?!」

先頭が振りかぶる。今回はこの数である。先頭は七人。さらに後ろには十人強が詰めており、波状攻撃の準備はできている——。

マキナを中心に、一箇所に集まっている。

「私が全滅させるわけではない」

☆

☆

「やれやれ」

へりに残っていたエンジュは、ピピッと合図が鳴ったのを待つて、先のマキナと同じく荷物置き場から下を覗いた。

上空百メートル……だが百人強が集まっていればよく見える。

……ひとりひとりの顔までは見えないのは幸いだった。加賀利炎呪はエンジュにとつて、同じ人物から分かれた光と影である。髪型やファクションセンスこそちがえど顔つきは同じであり、見たくない。

——ボンッ！

へりが爆発した。

エンジュの背中から出る金色の翼に触れてのことだ。

天使の炎は本来『敵対者を滅ぼす光』。敵対していない限りあらゆる物質に熱を与えることはないが、

いま出しているものはちがう。通常の炎と同じジュール熱を帯びており、

炎の形が保てない。へり程度の金属の塊では一瞬で融解し破裂するだけの熱量を持つている。プラズマジェットと化している。

「灼^{プロミネンス}霊浄剣——」

愛用の大剣の先を、百人の中央へ向ける。

「直列^{サイジ}励起!!」

——キイイイイイイイイイイイイイイ!!

絹を裂くような甲高い音に、数百体のうち何名かは気付いた。

が、無駄だった。それは音とほぼ同じ速度で落ちてくる。

光にしてはずいぶんと遅いが、巨大な光の柱。音速でどすんとひしめく百人の真上にしにかかる。

ほとんどが瞬間的に攻撃だと察知し、防御態勢をとった。だがそれも悪手。着込んだ黒いタイトスーツには数十万度の炎を解体する減熱装置^Kが仕込まれているが、

「ごば……っ!」

「ぐエツツ!」

光の柱の熱量はそれを大きく上回っている。KKの限界を超え、内部に熱が伝わった瞬間。肉体的には魔族を基本としている百人は、全員焼き尽くされていく。

神の光たる天使の炎に、対抗できる魔族は存在しない。

そのまま群がる蟻に殺虫剤でもかけるよう、しらみつぶしに光の柱は周辺一帯を焼き尽くした。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

IV

天海雪乃

原作：さかさ傘

思春期なよアダム

EVIL EYES

ヴァルキリーコミックス十あとみつく文庫最終巻同時発売！

ついに完結!!



あとみつく文庫 8&9 巻ともに

好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!

小説家になるこの男性向けサイト
「ノックタリッシュノベルズ」
から書籍化!

ビギニングノベルズ
キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

タイズ?

あなたはどの

あとみっく文庫

呪祖喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めない電子書籍

フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界
ドキドキ
妹は
イカゲシクワ

ドキドキキアラフな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は隔月
発売!



二次元
**ドリーム
マガジン**
2D DREAM MAGAZINE

UN COMIC
アンソロジー

**敗北乙女
エクスタシー**

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!